

「おたく」ステレオタイプと社会的スキルに関する分析

菊池 聡

問 題

「おたく」というステレオタイプで語られる青少年たちがいる。ごく一般的な「おたく」とは、「サブカルチャーと言われる何らかのジャンルにマニアックに没頭し、同好の仲間と距離をとったつきあいを持つ以外は、一般的コミュニケーションが苦手で自閉的で根の暗い少年たちへの蔑称を含んだ呼び名」(浅羽, 1990)といったものだ。

この捉え方は、現代の社会的ステレオタイプの一つとして多くの人に共有されている。一方で近年は「おたく」特有の文化領域とされていたアニメやゲーム産業が活発化し、日本発の文化として海外で高い評価を受けることもある。その影響があつてか、「おたく」のポジティブな面を再評価する動きも多く見られるようになってきた。

しかし、「おたく」ステレオタイプの人格・行動特性に関する心理学的な実証研究はほとんど行われていない。本研究では、一般に共有されている「おたく」ステレオタイプの実態と、そうしたステレオタイプで形容される青少年の行動・性格特性を明らかにしたい。なお、「オタク」「ヲタク」などの表記もあるが、本稿では「おたく」に統一する。

「おたく」の歴史1 ステレオタイプの誕生

「おたく」という言葉が初めて社会に登場したのは、1983年に中森明夫による月刊誌上での連載『「おたく」の研究① 街には「おたく」がいっぱい』だとされている(中森, 1989に再録)。中森によれば、この呼称は同人誌即売会(コミケ)に集まる少年少女たちが、友人同士を他人行儀に「おたく」と呼び合ったことが起源とされる。中森は、そうした「おたく」少年少女たちのファッションや行動の異様さを誇張して表現しており、これが差別的な表現と受け取られる危惧から、まもなく連載は打ち切りになった。

ただし、中森が紹介した時点で、すでに同人誌サークルなどの仲間内では、「おたく」はネガティブ表現として陳腐化していたという指摘もある(岡田, 1996)。岡田によれば、「おたく」は慶応出身のSFファングループの中で使われるようになり、82年には、彼らが制作に関わったアニメ映画で用例が見られるという。

少なくとも、アニメやマンガ、特撮などに没入し、これらのディテールに関する情報にこだわりを持つ「おたく」的青少年層は、それ以前から拡大していた。この層が社会的に注目されるようになったのは、1977年に『宇宙戦艦ヤマト』(製作オフィス・アカデミー)が熱心なファンに押される形で劇場公開され、予期せぬブームとなった時点とすべきである。以後、70年代終盤から80年代前半にかけて、アニメ作品やSF映画をめぐる受け手側のさまざまな活動が活発化した。「おたく」という表現は、一般社会にとって不可解であっても無視できない規模になったこれらマニア層に対し、ステレオタイプのな枠組みを与えることで、

社会の中に位置づける働きを担ったとも言えるだろう。

次いで、「おたく」ステレオタイプを、決定的にネガティブなものとして印象づける事件が起こる。1989年8月、埼玉と東京で幼女4人が犠牲になった連続幼女誘拐殺人事件（広域重要指定117号）の犯人として宮崎勤被告が逮捕された（97年東京地裁で死刑判決、控訴中）。逮捕直後には、6千本におよぶビデオテープと大量のマンガ本が積み上げられた彼の自室の様子が繰り返し報道され、その情景は一般社会に強い衝撃を与えたのである。

そして、「自分の殻に閉じこもってビデオやマンガに没入し、社会性を身につけることができず、大人の異性と人間関係を結ぶことも困難だった「おたく」青年が、フィクションと現実の区別がつかなくなって猟奇的な幼女連続殺人に走った」という安易な分析がメディアを席卷することとなった。この極端なイメージは、「不可解な事件を一定の物語に定着させる」マスコミの働きのあらわれ（山崎，1989）の一つとして理解できる。たとえば、当初6千本のビデオの大半がホラーやロリコンビデオであったと報道され、ビデオの規制問題にまで発展した。しかし、実際にはこの種のビデオはごく少数であり、メディアによって作られた虚偽のイメージであることが裁判の中でも明らかにされている（大塚，1997）。ともかく、マスメディアや一般社会にとって、幼女連続殺人の異常性を帰属させる対象として、こうしたビデオや「おたく」人格特性が格好のものであったのは間違いない。

この宮崎事件報道をきっかけに、「おたく」という用語は一般向けのメディアに広く登場することになる。たとえば朝日新聞記事に「おたく」という用語が初登場したのもこの時期であり、宮崎逮捕直後の89年8月24日に、大塚英志（中森の連載時の編集者）が「ビデオマニアの「オタク少年」たちが新たな被差別者になる」のを危惧するコメントを寄せている。また、89年暮れには、「おたく」系の文化を概観した『おたくの本』が別冊宝島シリーズから出版された。

このような経緯で、一部のサブカルチャーの中でのみポピュラーであった「おたく」という表現は、社会的に異質な存在として強烈に焼き付けられ、「おたく」ステレオタイプが決定づけられたのである。その好例は「おたく」がはじめて収録された『現代用語の基礎知識』90年版にも見られる。その内容は明らかに宮崎事件の影響を色濃く受けている。

オタク族

ビデオやパソコンなどの同好会に出てきてお互いに相手のことを「おたく」と呼び合うネクラな若者が増えているという。自分のことしか考えられないミーイズム世代がハイテク社会のとりこになった結果、宮崎勤のような不気味で非人間的な孤立人間の劇場型犯罪が激発する傾向にある。ネクロフィリア（necrophilia＝屍姦）やペドフィリア（pedophilia＝小児性愛）、フェティシズム（fetishism＝呪物崇拜）から始まって、リカちゃん人形偏愛症やコンピューター・ハッカーに至るまで、外なる世界との回路がプツンした人間が、あまりにも無機質化したキーボード社会を中心に異常増殖しているらしい」（『現代用語の基礎知識90年版』風俗流行・マンガ文化とその周辺 p.74）

同じく、『情報・知識 imidas』でも、メンタルヘルスの項で90年ではじめて取り上げられ「対人恐怖的で、人間との肌の触れ合いに不安を持ち、機械、特に情報機器を通じての対人

関係のコピーで満足する傾向が強い」と表現されている。91年版では、青少年問題用語の項で「宮崎に限らず、アニメやパソコンなどに熱中するタイプに対人恐怖症的な傾向が認められ、そういうおたく族は二〇代前半の男子を中心に急増しており、宮崎事件は氷山の一角にすぎない」とある。このように、「おたく」とは差別的な表現であり、当時、NHKの放送では使用が禁じられていたという（岡田、1996）。

「おたく」の歴史2 再評価

一方で、「おたく」特有の行動をポジティブなものとして再評価しようとする動きも、このころに始まる。宮崎被告逮捕の翌年、90年3月10日には、朝日新聞経済面に「あなたもおたく族している？知識豊かなこだわり派 消費最前線に変化」という見出しで、おたくをターゲットとした経済活動が活発化している様子を報じている。ただ、この時点では「おたく族」という言葉について、別項で詳しい用語説明が添えられる形の紹介である。

『現代用語の基礎知識』も、91年版ですでに、排他的な対人関係やダサイファッションを揶揄した後であっても、「宮崎勤事件以来、言葉の意味は広がり、マンガ・アニメファンをはじめとした、一般からは異質な趣味を持つ層全体を指すようになったばかりか、マニアックで趣味にこだわるタイプをすべてそう呼ぶようになり、新しい消費層として注目されるようになった。また九〇年代のトレンド、新しい生き方として肯定的にとらえる週刊誌の記事も多くなってきている」と、その概念を変化させている。翌92年でも「九〇年代の新しい消費者層、情報化社会のニュータイプとして肯定的にとらえる見方も増えてきている」と、その傾向は続いた。しかし、97年版に至っても、「九〇年代の電腦情報化社会のクリエイティブなニュータイプとして捉えられることもあり、こだわり派に適用される言葉になり始めている」と表現され、こうした見方が依然として主流ではないことを示している。

だが、90年代初頭以降、「おたく」は単なる差別語ではなく「こだわりを持った消費者」という経済的要因から再評価される動きが一般社会に出てきたのは間違いない。そして、こうした報道が行われることにより、それまで自分の「子どもじみた」趣味への嗜好を抑圧させていた青年たちも、徐々に「おたく」的な消費活動へ参入するようになったと思われる。また80年代終わりごろから、初期のおたく文化の体験者たちがクリエイター、エディターとしてメディアの送り手に登場した点も見逃せない。彼らによって、マイナーなアニメや特撮作品がさまざまに引用され、また細かな資料までもが商品として流通するようになった。

このような状況下で、「おたく」文化をフィールドとする若手文化人が華々しくメディアに登場し、「おたく」の心性や行動を新時代を担うものとして理論付けを行った。その代表的な人物が、SFファンクラブ出身で、アニメ製作会社ガイナックスを設立した岡田斗司夫である。彼の論の特徴は、従来ひとくりにされることが多かった「ファン」「マニア」「おたく」を差別化したことにあり、ヒエラルキーの最上位に「おたく」を置いたことが「おたく」たちの琴線に触れるものであった。

岡田（1996）によれば、「おたく」とは、

(1)アニメの作画監督や原画マンの違いまでも深く味わえる姿勢と能力を持ち、映像に対する感受性を極端に進化させた「眼」を持つ人間。

(2)特定の領域にしか興味を持たないマニアと違い、作品相互の影響を語るだけでなくジャ

ソルをクロスオーバーすることができる。つまり、高度なリファレンス能力を持つ人間。したがって「おたくになるためには天文学的な経済的、時間的、知性的投資が必要」。

(3)おたくは社会適応力がないと形容されるほど、自分の「おもしろい」に敏感で忠実。かつ既存のファッションや流行に踊らされない自覚があり、高い情報分析能力で消費社会をリードするマーケット・リーダー。

以上、「おたく」は高度情報化社会の知のエリートの一つとして位置づけられる。もちろんこれらのイメージは、ごく一部の限られた層でしか実現しえない、いわば「おたく」の理想像にすぎない。岡田は1996年から東京大学で「おたく文化論」を開講して注目を浴び（岡田，1997）、多くのメディアを通してその活躍が広く紹介された。その一方で、国土庁や通産省のプロジェクトに参画するなど、「おたく」文化の理解と普及のキーパーソンとなった。

ただ、「おたく」再評価の功労者は岡田であったとしても、それが社会的に広まった最大の要因は、日本の経済状況の変化にある。これ以前の80年代バブル期は、DCブランドブームをはじめレストランの選択やワインの銘柄にこだわるスノッブ的な消費風潮が顕著だった時代である。これらブランド消費の先端を担った若者たちが「新人類」や「クリスタル族」という流行語で呼ばれていた。

大塚(1997)によれば、「おたく」と「新人類」は、差異化のこだわりという点で共通項があるかのようだが、「新人類」が既存の市場内での差異にこだわりを持った消費者だったのに対し、「おたく」は既存の商品市場・経済システムから乖離したところ（たとえばコミケ）などで独自の細分化された市場を築き上げてきた点で、両者は二分される。したがって、この時期の「おたく」たちは「ひたっている世界以外には、あまりエネルギーと金を費やさず、物材所有欲が小さく、企業にとって、正面から対応してもあまりうまみのない層」（浅羽，1991）だったのである。したがって、社会的に軽視、もしくは揶揄されるだけの層という位置づけにあった。

しかし、バブル崩壊によって新人類的な生活様式は凋落し、日本経済の様相も大きく変化した。その結果、細分化されていても安定成長していた「おたく」市場が、経済的にクローズアップされ、大きく飛躍することにもなる。アニメ映画『もののけ姫』（スタジオ・ジブリ）は日本映画の興行記録を塗り替え、また『新世紀エヴァンゲリオン』（ガイナックス）は作品の内容よりもCDやLDを含めた経済効果300億円以上という報道が注目を集めた。そして、90年代後半には、ゲーム業界、パソコン自作業界、アニメ業界などの「おたく」関連産業とも言える領域が、停滞する日本経済のなかでも最も活発な領域となったのである。

「おたく」文化の量的な拡大は、ネガティブなステレオタイプを払拭すると同時に、文化としての敷居を低くする。すると、そもそも細分化した領域へのこだわりであった旧来の「おたく」文化の概念は変化し、単にアニメやゲームに関わること自体が「おたく」と認識されるようになった。また「おたく」情報が大量に流通・消費されるようになる一方で、主体性が弱く、情報を享受するのみの受動的な新「おたく」層を大量に生み出している。この層は、逆境の中で「おたく」文化にこだわった旧来からの「おたく」層からは蔑視されることもあるが、一般から見れば「おたく」そのものである。このように、現在は「おたく」の大衆化と、それによる概念自体の変容が進行中であるといえるだろう。

「おたく」イメージとその起源をめぐって

「おたく」とは、その文化、行動・人格特性、経済的側面、など複数の次元でとらえられる構成概念である。たとえば、作家の竹熊（1997）はやや自嘲的に「おたく」の諸原則を次のようにまとめている。

①. 何歳になっても、マンガアニメなど子どもが好む対象を好むという子どもの欲望を持ち続けること。②. その好きなものが、社会一般でいう生産に寄与しないこと。③. 何かの目的のために資料を集めるのではなく、集めることが目的化するなどのように、手段と目的をあえて取り違えること。④. インテリとみなされたい、おしゃれでありたい、異性にもてたい、といった誘惑を断ち切り、あてがわれた文化を追いかける消費者としての若者層を拒否すること。

このような特徴の列挙は「おたく」をめぐる論説には数多く見られる。ただ、それぞれが断片的に「おたく像」をとらえてはいるものの、多くは独断に偏り、論理的に十分な根拠を示しているものは少ない。

そんな中でも、優れた論考を多く発表している評論家に浅羽通明がいる。浅羽（1991）は「おたく」を動機づける真の理由は、愛好するアニメやマンガをとともに楽しむ仲間との同類意識であると指摘している。その同類意識はジャンルの裏情報や専門知識を共有することで確認されるものである。これは同人誌などの多くがパロディを基盤としていることに端的に現れる。一般にパロディは、それを理解するために共通の教養が必要であり、そのような教養は、それを持たざるものを排除する性格を持つ。つまり、「おたく」仲間は、特定の情報体系の共有を喜び、一般人を排除するエリート意識が満喫できる世界を作ることができるのである。

しかし、唐沢（1999）は、共有される情報という意味での「おたく」的な文化（B級文化）をかなり前向きに捉えている。それは、現代の日本が世代間に共通する文化基盤を失っている中で、そのような断絶を埋める世代間の共通教養基盤として「おたく」的な対象が機能しようという指摘である。浅羽の論考から10年近くを経て、「情報共有」の意味づけが変化しているのは、「おたく」文化の拡大と変質を反映しているものとも考えられる。

また、パロディが成立するためには、作品自体を突き放して、単なる知識・情報として見る冷静さが要求される。浅羽は「おたく」に特徴的な点として、アニメやマンガに触れるとき、作品と自我を向き合わせ「個」の内面に向かう読みを完成させるよりは「読みを知的情報のレベルに蓄積させる方向を持つ」ことであるという。このように情報にこだわる「おたく」の姿勢は、前述の岡田が、対象を冷静かつ客観的に捉え、自分の価値観で世界を見る姿勢として評価したものと共通している。しかし、浅羽はこの「世界の傍観者」といった姿勢こそ、没価値的で無責任なものと批判しているのである。

そして浅羽は、「おたく」の心性の成立を、生活のすべてが学校システムによって画一化されるプロセスに求めた。同世代の中での自分のステイタスを求めて悩むアイデンティティ確立期において、自分が認められないという経験は、独自の専門知識や雑情報が認められる世界への指向を生む。そしてその世界の中で自分のアイデンティティを自覚すること、それがおたくの成立であるとしている。

これに対し、すでに85,6年に「おたく」を視野に入れた大規模なライフスタイル調査を行

った社会学者の宮台（1994）はこれに異を唱えている。宮台は、マニアックな青少年たちの文化類型はそれだけでは差別の対象とはならず、彼らが目立つ集団的な類型行動をとることで特定的人格類型との結びつきが認知され、ここに「おたく」というネガティブなイメージが産み出されたのだと考えている。ただし、宮台は多くの調査データを引用しながらも、自分が育った都心部のかなり特殊な学校環境での経験をもとにした強引な主張も目立つ。

精神分析的な立場から「おたく」を退行現象の一種と解釈したものに、田代による分析（1997）がある。人は、幼少期において他者と接触することをきっかけとして、自分と他者を区別し、やがて自己同一性を見いだすようになる。多くの場合、初の他者は母親であり、そのことは女性にとって自分の性にとって適切なモデルを提供する点で有利に働く。一方、男児にとっては、成長と共に女性指向を切断する必要があり、その結果、男性同一性を強化する特徴的な遊び・道具に関わるようになる。こうして、女兒は擬人化したモノや他者との関係性をめぐる遊びを好むようになり、男児は世界との関係性（モノ化）を中心とする遊びに向かう。この差異は、青年期の「おたく」活動にも見られ、アニメのように擬人化があり、人間関係や物語が成立しやすい領域では女性の参入が多い一方で、「ガンマニア、ナイフ、列車…」のようにモノ志向が強い領域ほど男性の比率が高い。

そして、モノに志向づけられた男児が、人間の関係性を学び、モノ志向から離脱する機会が思春期の異性との接触である。ところが、「そこでの失敗や挫折、あるいはその時点でのモノへの方向付けが強烈で、生身の女性にうまくアプローチできない男性は、容易により安全だと思われる慣れ親しんだ世界にどんどん退行する。つまりかつての女性性からの離脱のために与えられたモノの世界に再び自閉していく」。この「女性という性との適切な距離感の形成における社会的・現実的修正の機会の失敗」が「モノマニアックなおたくの生成である」と田代は結論づけた。精神分析的な見方は、単なる解釈にすぎないにしても、「おたく」をめぐるいくつかの現象を説明する理論として有効に働き、文脈によってはネガティブステレオタイプを助長するものとなるだろう。また、田代は、男性が突出して「おたく」的な傾向を持つことを前提に論を進めているが、これに対しては女性「おたく」論ともいべき荷宮（1995）の論考がある。

最近のものでは、社会心理学者の川上らが行った研究は非常に興味深い（川上・電通メディア社会プロジェクト、1999）。川上らは、①積極的なコミュニケーションネットワークを作り、②多くのメディア情報に接触し、③新しい情報機器を使いこなすことができるという三つの特徴を備えた層を情報イノベータ（革新者）層とした。そしてこの3要素のうち、②③の領域は優れていても、①のネットワークがかけている層を「おたく層」と分類した。川上によれば、この層は年齢的に若く、未婚者が多いなどの特徴があり、こうした社会的経験の少なさが「おたく」的な行動特性の原因と推測している。因果の方向性には別の解釈もありうるが、情報化社会の中での「おたく」像を大規模かつ実証的に捉えた注目すべき研究といえる。

ところで、80年代から90年代にかけて、多くの日本アニメが海外で紹介されて、東南アジアはもとより、欧米各国で日本と同じような「おたく」的ファン活動が活発化していることは多く報道されている。このような日本の「おたく」流入以前にも、アメリカでは、「おた

く」に近い意味を持つ俗語として Nerd があった。Nerd とは『研究社英和中辞典』によれば「1 無能な人、まぬけ。2 仕事にばかり熱中して社会性のない（つまらない）人：a computer ～ コンピューターおたく」である。80年代には、このステレオタイプを揶揄した映画『Revenge of the Nerds』（1984）と、複数の続編（FOX）も作られている。

この Nerd ステレオタイプと「おたく」ステレオタイプは、ファッションや対人行動、社会的評価など多くのネガティブな点で共通している（エンドウ、1991、1995）。その Nerd に関する興味深い論考に、天文学者で科学の啓蒙にも尽力した Sagan のものがある。彼は、遺稿『カール・セーガン 科学と悪霊を語る』の中で、「マックスウェルと科学オタク」（Maxwell and the Nerds）に一章を割き、現代の電磁気学の始祖の一人マックスウェルを「おたく（Nerd）」として紹介している。そして、現代の文明を支える科学知識の多くが、周囲からは変わり者と思われながら、自分の好奇心のままに研究活動に没頭する「おたく」たちによって成し遂げられたことを強調している。そして、この事実に理解を示さない政府や社会を批判すると共に、「おたく」的な心性は科学者にとって是非とも必要な資質であるとポジティブに評価している。

一方で、Nerd を「おたく」と訳すことに反対する指摘もある。梅田（1999）によれば、Nerd とは「最先端ソフトウェア技術に精通し、ソフトウェア開発を人生の最優先事項と無意識に位置づけている」人であり、この概念は日本語にはないという。こうした指摘の背景には、「おたく」という語に対する根強いネガティブステレオタイプがあると見ていられる。

一般に流布している言論人や文化人による「おたく」論の多くは、「おたく、かくあるべし」といった論考や、目立つステレオタイプや特定の人物を、人格や社会との関連で読み解くものが多数を占める。心理学や社会学の領域で、「おたく」ステレオタイプ自体がボトムアップ的に実証的な調査研究の対象となったのは前出の宮台や川上の他にはほとんど見られない。

これに対し、一般向け雑誌などでは「おたく」の特集が組まれた際に、「おたく」の一般イメージが測定されている例がある。たとえば雑誌『流行観測アクロス』（1996）では「オタク大調査」として、渋谷や秋葉原で20歳前後の男女141人に街頭アンケート調査（複数回答可）を行っている。

「あなたにとっての「オタク」とはどのような人か？」という設問にたいし、「何かをマニアックに集めている人」「ものごとくに凝る人」「マンガ・アニメ・コスプレなどが好きな人」を回答している人がいずれも複数回答で40%を越えている。一方で、「人とうまくつきあえない人」という対人関係困難をあげた回答者は20%以下にすぎない。しかし「オタクという言葉のイメージ」を問う設問では、「個性的」という回答が40%前後あるが、「暗い」「かっこ悪い」「内気、自閉的」というネガティブなイメージも、ほぼ同じ割合で上位を占める。

同様なものとして、黒岩（1997）のアンケートがある。ここでも、「おたく」は「視野が狭い、社交性に欠ける、外見的な印象が悪い」などの否定的なイメージが過半数を占め、「深い知識を持つ、エキスパート」などのポジティブな評価は14%である。

Table 1 「おたく」ステレオタイプの2種類

	a: ネガティブ	b: ポジティブ
「知」の姿勢	知識のための知識 世界を情報としてしか捉えられない 世間知として役に立たない	自分の興味のおもむくままに知識を追い求め、独自の価値観を持つ 冷静・客観的に情報を相対化する視点
「知」の領域	狭い領域に異常に濃い知識 社会的価値がない	一見、役に立たない創造活動こそ、世界を動かした
社会性	仲間内で閉じた集団で社会的に孤立 社会との接点を持ってない	旧来の価値に縛られない新しい社会を形成
人格特性	内向的で自己表現ができない 社会的スキルに欠ける	対象を相対的な視点でとらえる自己の価値観を確立 専門をきわめるため積極的な情報収集
経済市場	狭い限られた領域の市場 社会の大勢たりえない	細分化した消費市場の中で非常に活発 業界の思惑にとらわれない

これらの雑誌でのアンケートは対象者がかなり偏ったものと推測され、また、いずれも学術的な調査研究としては不十分なものである。しかし、「おたく」ステレオタイプを考えたときには、文化人による論考だけでなく、実際に一般に共有されているおたくのイメージからボトムアップ的に概念をとらえる考え方がぜひ必要となるだろう。

「おたく」ステレオタイプの二面性

以上、概観してきたさまざまな「おたく」像をまとめてみる。メディア文化人の論考は、それぞれが「おたく」文化への自負と愛着から、「おたく」の理想型とも言えるイメージを提示している。一方で、社会的には宮崎事件に象徴されるネガティブなイメージも依然として根強い。つまり、「おたく」ステレオタイプは、大別すると

- a. 差別語としての負のステレオタイプ
- b. おたく文化人による知のエリートとしてのステレオタイプ

の二つの面が存在していることになる（たとえば中森・宮台，1999）。

これらを領域ごとに分けてみると、Table 1のようにまとめられる。

目 的

本研究では、実際に現代の「おたく」文化の中心層である20歳前後の青少年たちが持つ「おたく」ステレオタイプを具体的に調査する。そして、このステレオタイプに合致する態度を「おたく」態度とし、尺度構成によって、その次元と定量的な把握を試みる。

特に「おたく」ステレオタイプの成立当初から、この態度は対人関係をうまく結べないことが特徴とされている。これは性格心理学において、内向性や非社交性という概念で考えることができるが、対人場面能力に着目した社会的スキル（social skills）の欠如という観点から、よりステレオタイプに即したものであろう。社会的スキルは、言語的・非言語的な対人行動を統合・統制するだけでなく、相手の行動を解釈、社会的ルールに関する知識、感情統制などを含む広範な概念である。

菊池章夫（1988）は、Goldstein, Sprafkin, Gershaw & Klein らがリストアップした6種

類の社会的スキル（1. 初歩的なスキル, 2. 高度なスキル, 3. 感情処理のスキル, 4. 攻撃に代わるスキル, 5. ストレスを処理するスキル, 6. 計画のスキル）のリストをもとに調査を実施し, 18項目の日本語版の社会的スキル尺度（Kiss18）を作成した。Kiss18で測られる高い社会的スキルの持ち主とは, 初対面の相手とでも適切なコミュニケーションを持つことができ, 相手の気持ちを損なうことなく自分の意見や感情を主張し, 相手とのトラブルを上手に処理できる, と自己認識している者である。Kiss18の内的整合性と再テスト信頼性は十分に高く, YG 性格検査との相関では, 一般的活動性・支配性・社会的外向性と正の相関を持ち, 抑うつ性・気分の変化・劣等感・神経質などとは負の相関を示している。また, 菅原（1998）では対人消極傾向尺度と負の相関が, 松島（1999）では, 特性シャイネス尺度とは高い負, 自己開示とは正の相関が示された（その他, 関連研究は菊池章夫（1998,1999）参照）。

もし, ネガティブなステレオタイプ通り, 「おたく」ステレオタイプの特徴が社会的スキルの欠如であるなら, Kiss18は「おたく」態度尺度と負の相関を示すことが予想される。逆に, 「おたく」文化人の論考では, 高度情報化社会の中で「おたく」的趣味活動に深くかかわることが, 必然的に社会的ネットワークの中で多くの人と適切なコミュニケーションを持つことと不可分であると強調されている。このような想定が正しければ, 「おたく」態度が高い者は, 高い社会的スキルを備えていると考えられる。これらの仮説をもとに「おたく」態度と社会的スキルの実際の関連性を明らかにしたい。

予備調査・方法

被調査者 東京都下と長野県内の2国立大学大学生208名（男性121,女性87,平均年齢19.2歳）。

調査内容 「おたく」ステレオタイプの収集のため, 自由記述の質問2項目と選択肢式3項目について, 講義中に無記名で記入を求めた。

自由記述質問

(1)「あなたは「おたく」とはどのような人だと思いますか？

最も思うこと一つと, その他, おたくの特徴をいくつでも書いて下さい」

(2)「あなたは「おたく」と聞いてどんなジャンルを連想しますか？

最も連想するものを一つと, その他思いつくジャンルをいくつでも書いて下さい。」

選択肢式質問では, 「おたくと言われて, 自分自身に思い当たるフシがあるか?」「他人から「おたく」的と言われるとどう感じるか?」「周囲に「おたく」的な人があるか」を尋ねたものであった。

予備調査・結果

自由記述(1)の回答を整理し, 「最も思うこと」の内容をネガティブなもの, ポジティブなもの, 判断できないものの三通りに評定した (Figure 1)。

自由記述(2)では, 複数回答分で444回答, 全72ジャンルを得た。その分類を Figure 2.に,

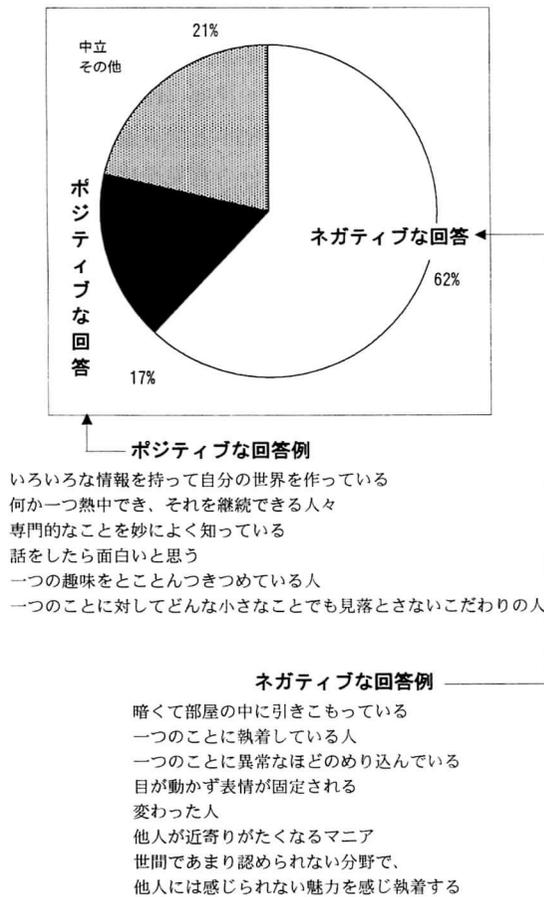


Figure 1 質問「あなたは「おたく」をどう思う人だと思いませんか」
 (「最も思うこと」に関する自由記述を分類)

また選択肢式設問への回答を整理したものを Figure 3. に示した。

これらの自由記述から、「おたく」的態度をあらわす表現を評定者 3 名で分類整理した。さらに、1989 年以降の新聞記事や用語年鑑、出版物などから、「おたく」ステレオタイプを特徴づける表現を収集した。これらの表現から三名の評定者の合議により 38 項目の「おたく」態度予備項目を作成した。

本調査・方法

被調査者 東京都下の私立大学と長野県内の国立大学の一年次学生に、講義時間に大学生生活実態調査の名目が無記名調査として実施した。無効回答を除く分析対象者は 334 名（男性 220、女性 114）。

調査項目 予備調査で作成した 38 項目の予備尺度項目に、MMPI を参考に作成した L スケール項目 4 項目を加えた。これらは「かなりそうである」から「全くそうでない」までの 5 段階

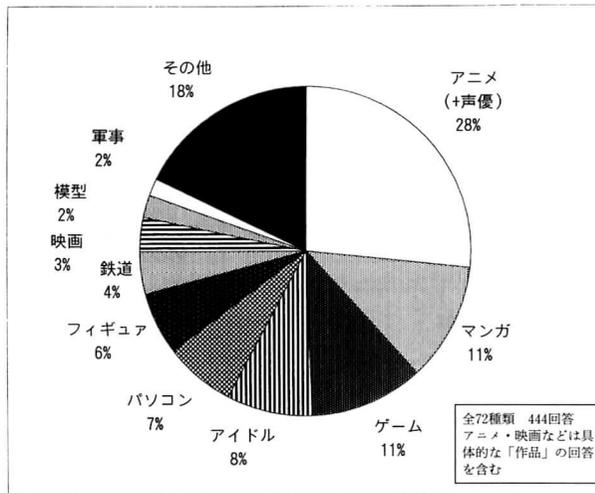


Figure 2 質問「あなたは「おたく」と聞いてどんなジャンルを連想しますか」(複数回答可)

評定尺度(1~5点)とした。また、Lスケールは、社会的にネガティブな概念に関する調査に対して、回答者が過度に防衛的な姿勢をとる可能性を考慮したものである。次いで社会的スキル質問紙(Kiss18)を実施し、その後、自分自身の「おたく」度などについて、予備調査と同様の4段階の評定を求めた。

本調査・結果

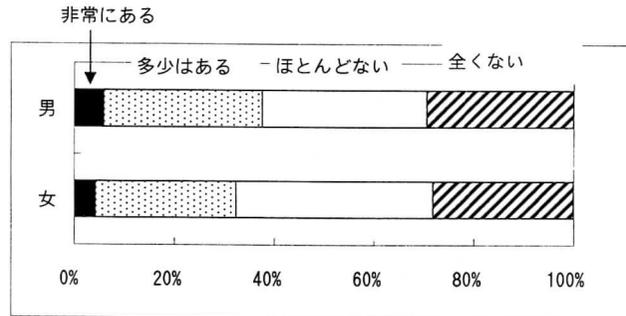
L得点上位者3%を除外した後、「おたく」態度尺度予備項目の評定値に対して、バリマックス法による因子分析を行った。因子負荷の低い項目を除き、4因子で単純構造を得た(Table 2.)。

第1因子は、自分の趣味や興味関心事に熱中しすぎることや、深い知識を持つことを示すもので「趣味への没入」因子と命名した。第2因子は、対人関係が苦手であったり、限定されたものであることを示すもので「社会的内向」因子と命名した。第3因子は、関心事やファッションが社会的な標準と合致しないことを示すもので「自己流の価値観」と命名した。第四因子はインドアの活動を好む「孤独指向」と命名した。

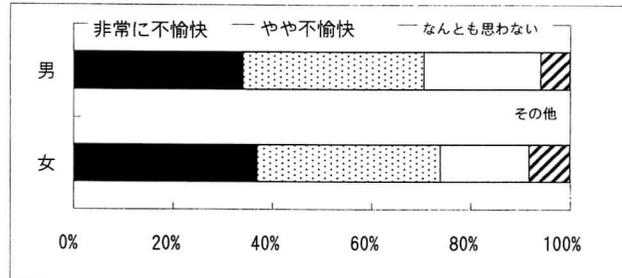
それぞれの因子に負荷の高い項目の評定値の合計を各下位尺度得点とした(趣味没入尺度、社会的内向尺度、自己流尺度、孤独指向尺度)。いずれも、得点が高い場合にその傾向が強くなる。ただしいずれも α の値は十分ではない。特に孤独指向尺度は α が低く、尺度化には不適だが、参考のため以下の分析には加えている。

「おたくと言われて思い当たるフシがあるか」に対する回答を1から4点で数値化し、「おたく自己評定」得点とした。「おたく」態度4下位尺度得点は、「おたく自己評定」と有意な正の相関があり(Table 3)、ある程度の妥当性は確保されていると考えられる。また、4下位尺度得点を男女で比較すると、社会的内向尺度で差が見られない他は、残る3尺度いずれでも、男性が有意に女性より高い得点を示した。

Q 「おたく」と言われて、自分に思い当たるフシがありますか？



Q 友人から「おたく的」と言われると、どう感じますか？



Q あなたの周囲に「おたく」的な人がいますか？

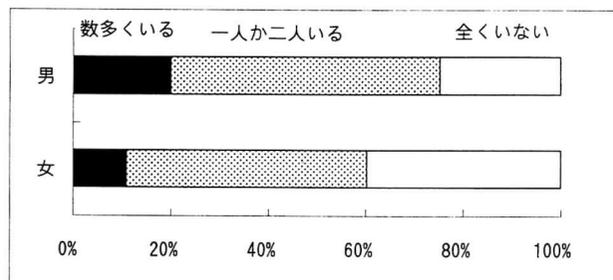


Figure 3 「おたく」に関する設問への男女別回答比率 (n = 208)

Kiss18と「おたく」下位4尺度、自己評定の相関をTable 3に示す。Kiss18の平均値は、それぞれ男性54.03 (S.D. = 10.33), 女性56.45 (S.D. = 9.78)であった。

考 察

今回の被調査者は、ランダムサンプルではないものの都市部と地方の3総合大学10学部にわたっており、現在の大学生のごく一般的な考え方を反映していると考えられる。ただし、たとえ大学に在籍しても、強度の「おたく」態度の持ち主が大教室の授業を欠席しがちなことも考えられる。その意味ですべての分析は、最もコアな「おたく」層を欠いたものとなっている可能性には留意したい。

Table 2 「おたく」態度尺度採用項目と因子負荷

質問項目		F 1	F 2	F 3	F 4
趣味への 没入	趣味に対して何らかのこだわりがある。	.74	.09	.05	.01
	趣味に対してかなり深い知識を持っている	.73	-.03	.06	-.07
	自分の得意な分野について話し始めると止まらない	.60	-.14	.05	-.24
	趣味に熱中する自分が好きだ	.60	.02	-.05	.12
	趣味にお金をかける	.60	.16	-.02	.07
	さまざまな趣味を持っている	.60	-.05	-.08	.10
	気に入った物をつい集めてしまう	.55	.01	-.02	-.28
	一つのことに熱中して寝食を忘れることがある	.49	-.08	.11	-.11
$\alpha = .797$	自分が面白いと思うことは、人がなんと言おうと気にならない	.45	-.09	.40	.26
社会的 内向	他人と話すことは苦手である	.01	.75	.12	-.10
	明るいとよく言われる	.08	-.59	-.02	.33
	集団で行動するのは苦手である	.15	.58	.30	.05
	自分の内面にかかわることをあまり話さない	.06	.56	.04	-.30
	あまり知らない人が周囲にいるとき、目立つのが好きである	.16	-.47	.12	.26
	周りの人にあまり関心がない	.20	.46	.20	.13
	世間的にはつまらないことでも仲間内で盛り上がる	.13	-.42	.19	-.05
	共通した趣味を持つ友人以外とはあまりつきあわない	.09	.34	.13	-.28
$\alpha = .679$	スポーツをするのが好きである	.19	-.34	-.23	-.07
自己流の 価値観	身だしなみに気をつかわない方である	-.08	.08	.71	-.23
	流行のファッションはくだらない	.07	.12	.70	.05
	おしゃれだとよく言われる	.26	-.08	-.66	.25
$\alpha = .633$	自分が面白いと思うことは、社会的に評価されていないことが多い	.26	.08	.53	-.07
孤独指向	マンガが好きである	.17	.02	.03	.64
	ゲームが好きである	.34	-.11	.17	.59
	異性の友人が多い	.20	-.34	-.14	-.58
	部屋にこもるのは嫌いだ	.09	-.26	-.08	-.44
	固有价值	3.87	3.56	1.74	1.49
	累積寄与率	14.9	28.6	35.3	41.0

まず、自由記述によって収集した「おたく」イメージや Figure 3 の結果を見ると、「おたく」文化人の活躍にもかかわらず、一般大学生の間ではネガティブなステレオタイプが依然として大勢を占めることがわかる。「おたく」という表現に不快感を持つ者が過半数である一方で、3～4割の学生が自分にも「おたく」的部分を認識しているという結果は、「おたく」にともなう屈折した感情を表すものとして興味深い。今回の予備調査を基礎データとし、今後継続的に同様の調査と比較を続けることで、「おたく」に関する一般イメージの変遷を捉えることが可能となるだろう。

次いで行った「おたく」態度尺度構成で予想外だったのは、当初の38項目に含まれていた「アニメは子どもの観るものである」「パソコンは苦手(逆転項目)」「ビデオをよく見る」などの「おたく」行動類型と考えられていた項目が、全般に因子負荷が低く、最終尺度に採用できなかったことである。「アニメ…」に関しては、「おたく」態度の強弱に関わらず、すでに「子どもの観るものだ」という認識は消滅しているためだと思われる。また、おたく文

Table 3 「おたく」態度下位尺度と、「おたく」自己評定, 社会的スキルの相関

	趣味	内向	価値観	孤独	KISS18
趣味への没入					.18 *
社会的内向	-.02				-.59 **
自己流の価値観	.08	.29 **			-.32 **
孤独指向	.11	.30 **	.31 **		-.34 **
おたく自己評定	.36 **	.22 **	.32 **	.39 **	.11

* p < .05 ** p < .01

他人の指摘している「自嘲的である」「好奇心が旺盛」「現実逃避しがち」といった項目も、同じく因子負荷が明確でなく採用されなかった。今回の尺度構成では各下位尺度とも自己評定とは正の関連性を示し、ある程度妥当なものになったと考えられる。しかし、 α 係数の値も低く、態度尺度として完成させるためには、各項目の表現をさらに精選することが必要になるだろう。

今回のデータからは大学の専攻による「おたく」態度差を検討することができる。しかし、専攻によって男女比が異なり、学部別男女で分析すると群間比較には不十分なデータ数になるため分析を省略した。今後データを蓄積すれば、Saganが指摘する基礎科学系専攻と「おたく」態度の関連性を検証することが可能になる。また、今回は欠けていた「芸術系」や「女子大・女子短大」における「おたく」態度の分析も発展的な課題となるだろう。

最も興味深い結果は、Kiss18が「社会的内向」、「自己流の価値観」、「孤独指向」などと有意な負の相関を示した中で、「趣味への没入」とはごく弱いながらも有意な正の相関を示したことである。前三者の相関は、構成概念から見ても妥当なものであり、旧来のステレオタイプとも合致する。しかし、趣味活動に強くコミットし、熱中している人ほど、少なくとも社会的スキルは低下しない傾向があった。つまり、社会的スキルの欠如を「おたく」態度と結びつけるステレオタイプは、趣味活動が活発だという側面では当てはまらないことを示している。これはネガティブな「おたく」像に対する反証として重要な意味を持つと思われる。

ただし、今回用いたKiss18は、他者と対人関係をうまく結んだり、自己主張や援助、トラブルの処理などの対人関係行動を適切にとれるかを主観的に評定させるものである。ここで想定しているコミュニケーション相手は、「他人」としてのみ表現されており、その位置づけは回答者によって異なっていたことも考えられる。すなわち「他人」が、広く一般の社会的他者なのか、もしくは、同じような趣味を持つ同好の士という他者（いわゆる「おたく」仲間）なのかは、Kiss18からは判断できない。趣味への没入とともに上昇する社会的スキルは、実はそうした仲間内でしか通用しないものである可能性も考えなければならない。自己報告法を用いる点で困難が伴うと予想されるが、こうした疑問の解決を目指した研究が今後の課題となるだろう。なお、Kiss18の平均値自体は、菊池章夫（1998）がまとめた高校生から大学生の平均値と一致するものであった。

引用文献

浅羽通明 1990 ニセ学生マニュアル死闘編 徳間書店

- 浅羽通明 1991 天使の王国 JICC 出版局
- エンドウ,ホーテンス,S. 1991 近代プログラマの夕 アスキー出版局
- エンドウ,ホーテンス,S. 1995 近代プログラマの夕2 アスキー出版局
- 唐沢俊一 1999 B級学マンガ編 海拓社
- 川上和久・電通メディア社会プロジェクト 1999 情報イノベータ 講談社
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 1998 また思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 1999 Kiss-18の12年 日本性格心理学会第8回大会発表論文集
- 黒岩静也 1997 流行批評版オタク解剖学 流行批評(編)オタクになれないアニメ好きの本, 40-43.
- 松島るみ 1999 シャイネスが自己開示に及ぼす影響—社会的スキルを媒介として— 日本教育心理学会第41回大会発表論文集 357
- 宮台真司 1994 制服少女たちの選択 講談社
- 中森明夫 1989 僕が「おたく」の名付け親になった事情 別冊宝島104おたくの本, 89-100.
- 中森明夫・宮台真司 1999 オタク化 宮台真司・松沢呉一(編) ポップカルチャー 毎日新聞社 Pp.90-95.
- 荷宮和子 1995 おたく少女の経済学 コミックマーケットに群がる少女たち 廣済堂
- 大塚英志 1997 ぼくと宮崎勤の80年代「おたく」の誕生1983年 諸君, 10, 192-197.
- 大塚英志 1997 ぼくと宮崎勤の80年代 新人類という運動 諸君, 11, 172-177.
- 岡田斗司夫 1996 オタク学入門 太田出版
- 岡田斗司夫 1997 東大オタク学講座 講談社
- セーガン,C. 青木薫(訳) 1997 カール・セーガン 科学と悪霊を語る 新潮社 (Sagan, C. 1996 The Demon-Haunted World. Ballantine Books, NewYork.)
- 菅原健介 1998 シャイネスにおける対人不安傾向 性格心理学研究 7, 22-32.
- 竹熊健太郎 1997 正しいヲタクとなるために 岡田斗司夫・唐沢俊一・眠田直(編)オタクアミーゴス ソフトバンク p.98-99.
- 田代 順 1997 すべての男性は「女性」である 別冊宝島279わかりたいあなたのための心理学入門 95-98.
- 梅田望夫 1999 無料OS=Linuxの出現は「ナード」とビジネス界の関係を一変させる 文藝春秋社(編)日本の論点2 Pp.722-725.
- 山崎浩一 1989 ぼくらはあの事件を何一つしらない 太田出版(編)Mの時代 太田出版 Pp.166-170.
- 現代用語の基礎知識 1990, 1991, 1992, 1997 自由国民社
- 情報・知識 imidas 1990, 1991 集英社
- 流行観測アクロス 1996, 9月号 パルコ

今回の調査には、東京学芸大学・鎌田正裕助教授、信州大学人文科学研究科・阿部元昭、河南やよい、松本充司、同人文学部越川則子の各位にご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。